

奈良山出土の藏骨器と墨

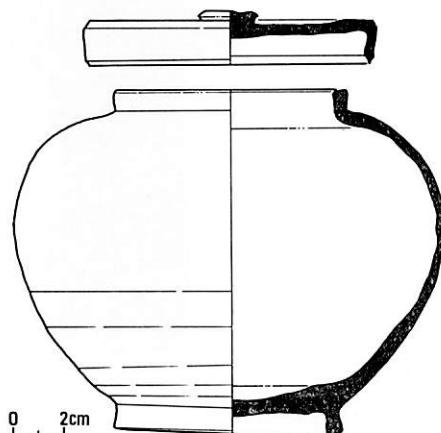
平城宮跡発掘調査部

奈良山丘陵から数年前に出土した藏骨器と萬年通宝2, 神功開宝3などの一括遺物が昭和52年4月, 発見者によって平城宮跡発掘調査部に届けられた。調査部では所定の手続きをとると共に現地を確認したが, 発見時に藏骨器中からとり出したというカーボン塊を光学的な観察をした結果, 墨であることが判明した。現存するのは小指頭のもの1個と米粒大小の小片数個のみであるが, 昨年, 奈良市平松町(平城宮跡発掘調査部 第100次調査)で完形の墨と筆管が藏骨器中からみつかっていることから, とりあえずここに紹介する次第である。

藏骨器の出土地は奈良市奈良阪町で, ウワナベ古墳から500m程北へ谷に入った東側の丘陵尾根上である。標高107mの丘陵頂から西へやや降ったところに自然崩壊による崖があり, この斜面に藏骨器の一部が露出していたのを, 昭和50年秋通りがかりにみつけ, 掘り出して自宅に持ち帰ったという。地下40cm程のところに埋置されていたらしいが, その後の崩壊のため墓塚などの形跡はすでに認められなかった。

藏骨器はいわゆる薬壺形の須恵器であり, 直立する短かい口縁と丸く張った胴にやや外反する高台を持つ。外面は口縁から胴上半部をロクロ撫でし, 下半はヘラケズリをする。底部外面はヘラケズリに撫でを加える。色調はやや白っぽい灰色を呈し, 胎土中には細砂を含む。蓋は平坦な頂部と扁平なつまみを持ち, 口縁部は直立する。頂部はヘラケズリ, 口縁部は内外ともに撫でてある。色調, 胎土は壺に同じである。時期は型式からみて奈良末頃とみられる。総高さ14.8cm, 壺高さ14.0cm, 口径9.1cm, 最大径17.1cm, 底径9.0cm, 蓋径11.2cm, 高さ2.4cm。

なお銅錢5枚は, 器底に付着した錆から器底中央に一枚を置き, この四方に文字面を上にして並べてあったようである。いずれもサビが削られているが, うち三枚には文字面のサビ上に絹とみられる細い布目痕が認められる。萬年通宝はともに普通型であるが, うち一点(a)は6.5gもあり極めて重い(平均4g)。神功開宝は大様型(c)と長刀型(d・e)がある。(佐藤興治)



×印 出土地点